
3rdworld

Craft

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3rd world

【Nコード】

N3315F

【作者名】

Craft

【あらすじ】

現実でもない、非現実でもない、三番目の仮想現実。そこで様々な出会いや経験は決して擬似的なものでなく、かけがえのないものとなっていく。

第一章 訪問者

「…ただいま」

家の玄関のドアを開け独り言のように呟くと、淳はそのまま自室のある二階へと続く階段を駆け上がろうとした。

「おい、こっちこっち」

そのとき、突然家の自分を呼ぶ声に足を止める。

淳は肩をすくめると、手にもった通学用のカバンを一先ず階段に置き、声がしたリビングへ向かった。

彼の名前は結城淳。ユウキジュン

都内の私立大学に通う学生で、現在はこの家で一人で暮らしていた。就活を控えたこの時期にも関わらず、両親が離婚裁判中という頭痛の種でしかない夫婦喧嘩の延長に付き合わされていたためだ。

「辰巳叔父さん、来るときは連絡して下さいよ？ビックリしたなあ」
リビングの硝子ドアを開けるなり、ソファーに座る人物に文句を言う。

「すまんすまん、どうしても急な用事があったな」

辰巳叔父さんと言われた男は、眼鏡を掛け無精髭を生やした中年だった。

「…お久しぶりです。急な用事って何ですか？」

ぞんざいな挨拶をすると、淳は着込んだコートを脱いで彼の横に座る。

「明日のうちの試験の事。それより珈琲が飲みたいなあ？淳君」

「…はいはい、気付かなくてすみませんね」

テーブルの上にある電気ポットの電源を確かめ、インスタントコーヒーを入れる準備をする。

「明日な、俺が送迎することになった。朝8時に来るから寝坊するなよ」

「もしかしてウチの大学の生徒を全員拾ってから？」

「ああ、まあ5人だからそう早めに出る必要は無いけどな。お前、準備は？」

辰巳は胸ポケットから取り出した煙草を口にくわえる。

「してませんよ。VRの中だし準備なんか…」

その動作を見て灰皿を渡すと、辰巳は軽く頭を下げてライターで火を点けた。

「……お前な、せっかく内部情報教えてやったのに。ゲームやってるか？」

「サードワールドですか？最近忙しくて…それに5年前のプロトタイプなわけですし…」

辰巳はがくんと首を垂れると、横に振って続ける。

「本気で受かる意思あるのか？今年は受験者数4桁はいつたらしい

ぞ？」

目の前に座る、煙草を吹かしながら憔悴しきった顔をしているこの人は、ゲーム業界最大手の企業に在籍し、開発部門の主任を勤めている。

その辰巳が5年前に興味で開発したサードワールドというPC用オンラインRPGに、淳は高校生の頃見事にハマってしまい、将来の道の第一進路にしていた。

「もちろんですよ。ゲーム経験者は僕と佐藤だけですし、伊達に何百時間も費やしてないですからね」

「佐藤：ああ、あの天才君か。俺はお前が心配だよ」

「今日もアイツと後で相談するつもりです。きっと、辰巳叔父さんから情報引き出したか？って電話来そうですし…珈琲どうぞ」

熱湯を注いだカップから、珈琲の独特な香ばしいかがりが部屋を漂い始めた。

「あの子は本当貪欲だからなあ、誰かさんと違って」

「だから嫌いなんですよ…効率重視の考えが」

「そう無下にするな。幼なじみだろう？」

辰巳は目を閉じて珈琲の香を楽しむと、そう言った。しかし淳はどうしても素直に受け取れず、眉をひそめてしまう。

「……さて、そろそろ休憩時間も終わりだな。じゃあ仕事に戻るわ」

腕時計を確かめた後で、彼は立ち上がって告げた。

「珈琲飲んでないじゃないですか、それに夕食は？」

「仕事の関係で食欲無いんだ。接続型VRも副作用は大きいな」

「……あんまり無理しないで下さいよ。辰巳叔父さんに引導を渡すのは僕なんですからね？」

「はっはっは。ともかく明日は頑張れっ！」

大きな口で笑うと、辰巳は淳の肩を軽く叩いた。

そして、じゃあなとだけ残して静かに帰っていった。

旧友

辰巳が帰った後、軽目の夕食で一人で済ませた淳は、二階の自室の隅にある机の前に座っていた。

「…心配だな、辰巳叔父さん」

彼は幼い頃からよく可愛がってくれていて、淳も彼のことが大好きだった。

そして彼の手掛けた作品に触れ、体感したことで『大好きな叔父』は『尊敬する叔父』になった。

しかし彼へと続く道を辿るにつれ、その大きさに、その遠さに、その険しさを改めて認識してしまい最近では会うことすら億劫に感じるようになっていた。

… … …

机の上に置いた携帯が振動して耳障りな音を起てる。

「…はい、もしもし？」

「あ、アツシだよアツシ。今大丈夫か？」

電話の相手は、辰巳との会話にも出てきた佐藤^{サトウ}淳^{アツシ}だった。

「うん。ちょうど辰巳叔父さんが帰ったところ」

「そうか、で？何か聞けたか？」

予想通りの質問。

少し笑いそうになるのを堪えて、結果を告げた。

「残念。だつて聞き出してないもん。ただでさえ試験内容の事を知ってるんだし、これ以上は卑怯だよ」

「お前なあ…俺はともかく、筆記試験の点数悪かったんだろ？大丈夫かよ」

アツシの声はいかにも残念そうで、しかしそれを隠すように話題を変えたように聞こえた。

「大丈夫じゃない？あ、それより受験者数4桁だつて！なんか楽しみだね」

「…少なく見積もって1000人のプレイヤーか。入社試験って言うより、もうオンラインゲームだな」

淳とアツシが志望する辰巳の企業は、独自の入社採用試験を実施していた。

筆記試験と適性試験の二通りだ。

適性試験はVRヴァーチャルリアルの中で行われる試験であり、五感を備えた仮想空間を味わえるとあって記念受験者も多い。

しかし実際には間接型VRと呼ばれるものが採用されているため、仮想空間の中での出来事は記憶も何も全て体感することが出来ない仕組みになっている。

「勿体ないよなあ、接続型ならもつと面白くなりそうなのによ！」

「……仕方ないよ。辰巳叔父さんも言ってたけど、まだ接続型は人体に及ぼす影響が計り知れないから」

今思えば、辰巳叔父さんは少し痩せたのかもしれない。あの時は全然気づかなかったが、昔は食えることが生き甲斐のような人だった。それなのに仕事で接続型を導入したと聞いてから、何だか元気が無くなってきた気がする。

「……辰巳さん、そんなに具合悪そうだったのか？」

「んー今考えれば。…明日は、うちの大学の受験者全員迎えに来るみたいよ！」

無意識に頭に浮かんだ不吉なイメージを振り払うかのように、語気が強くなってしまった。

「ああ、聞いた聞いた。…お前、他のメンバーにバラしてないよな？…サードワールドのこと」

アツシの思いがけない言葉に、顔が歪む。

「話してないよ。友達じゃないし…それにしてもアツシは気にしすぎだよ？」

「そうだな。いや、悪い。でも辰巳さんは俺にとっても憧れの人だからさ。どうしても試験パスしたくて」

「まあ、そうだね」

素っ気ない返事をする、椅子から移動してボタンとベッドに倒れ込んだ。

アツシはすぐに謝る奴だ。でもそれは反省しての謝罪ではなく、非を認めたアピール。長い付き合いから淳にはそれが分かっていた。

「はあ…試験かあ…サードワールドが理想通りの世界だといいね？」

二人が遊んだことのあるプロトタイプは、VRが生まれる前の作品であるため、PCを通しての二次元だった。それでも十二分に楽しかったけれど。

「…ああ、そうだな。そーいや覚えてるか？あの…」

その後はサードワールドの思ひ出話に華が咲いてしまい、結局電話を切って眠りについたのは明け方過ぎになっていた。

再会

「うわ…綺麗だなあ…」

頭上には雲一つない快晴の青空がどこまでも広がり、眼前には新緑の香りと共に風に吹かれてなびく草原が地平線の彼方まで続いていた。

それにしても何故僕はこんな大平原に立っているのだろう。そもそも記憶が無い。

断片的には残ってはいるが思い出せるのは、辰巳叔父さんの案内で試験会場の研究所に行ったところで途絶えしまっている。

「……もしかして…ここがサードワールドの中？」

確かにそれなら幾分か納得することが出来る。

「うん…そう割り切るしかないよね…」

ジューンはそう独語すると、自分の体を確かめた。

「思いつきりRPGの初期装備ってカンジだね」

服装は簡素な麻布で作られたもので、腰には銅製の短剣がさしてあった。

試しにそれを鞘から引き抜いてみるが、切れ味は悪そうで装飾も施されていない。

「そう言えば…仮想空間のはずなのに視覚も聴覚も嗅覚も…五感全

てここまで再現出来るなんて凄いや…」

軽く屈伸や準備運動などをしてみたが、全く違和感はなかった。
ぐつと息を止めて腰を擦った瞬間、後ろに何か建物のようなものが見えた。

「んっ…あれ？何だろう。掘っ建て小屋…？」

特に目的も現状では無く、とりあえずその小屋に向かって歩き始める。しかし段々と気分が高揚し始め、いつの間にかジューンは走り出していた。

「はぁ…はぁ…なんか…気持ちいいなっ」

現実には滅多に味わえない世界。高層ビルも煩い自動車も存在しない、新鮮な空気と清々しい風が体を包む。

「とーちやくっ！！へえ、意外と大きいな」

遠くからは大して大きくもない急ぎ仕事で作られた小屋に見えたが、目の前に立つと一家族が生活出来そうなログハウスだった。

「…お邪魔します…」

そう呟いて入口の木製の扉を押し開くと、奥でガタンと物音がした。

「…誰だ？…あれ？もしかして…ジューンか？」

中から聞こえた声は、聞き覚えのあるものだった。

「そうですが…ってアツシ!？」

静かに部屋に入ると、ジュンと同じ服装をしたアツシが笑顔で立っていた。

「ああ、良かった。随分はやく合流出来てさ」

「だね。けどアツシ違くない？久々だからかな」

茶色く染めた短髪、眼鏡を掛けた端正な顔立ち。身長もジュンと同じぐらいで体格もリアルと変わらなかったが、どこか雰囲気違った。

「多分VRの中だから補正掛かってるんだろ。そう言うお前もかっこよくなってるし？」

「…はいはい。でもやっぱりこっつてVRなんだ？」

にやにやしているアツシを無視して、会話を続ける。

「あ？何言ってるんだ。ちゃんと説明あったろ？ほらアイデアとかいうAIから」

「何それ…全然覚えてないよ…いきなり草むらに突っ立ってたよ…」

「ははは、脳天気な奴。とりあえず座れ」

やや埃が積もった屋内には、机や椅子などの家具が一式あった。その一つにアツシが跨がって、反対の椅子を指差す。

「えーと、まず何から説明するか…あ、VRならではのアレか」

そう言うとは彼は右手を前に突き出し、指を鳴らした。

「これがPW。^{バーソナルウィンドウ}所謂メニュー画面な。出してみ？」

アツシの目の前に突然青い窓枠が現れる。それを見倣ってジュンも指を鳴らしてみたが、何も起きない。

「ん？あーそうそう。指は関係ない。心の中でPWって唱えるだけ嫌な顔でアツシを見返したジュンは、面倒くさがりながらPWと呟く。

すると、軽い電子音がして半透明な画面が浮かび上がった。アツシのPWが半透明に見えなかったのは、多分他人から見えないようにするためなんだろうと思った。

「ステータスやら色々載ってるから、後で教えるよ。と言ってもイデアから習ったのはこれだけだが」

ジュンの耳にはそんな言葉は届かず、何度もPWを出したり閉めたりしていた。

始まりの街

「ねーアツシ、まだかかりそう？」

ジウンとアツシは出会ったログハウスを出て、街道と思わしき畦道あぜみちを歩いていた。

理由はいくつかある。

一つは活動拠点としては何もかもが足りなかった。

家具一式と二階には寝具があつたが、食糧などは一切なかった。それに初期装備の短剣では狩りに行く気もしない。

二つめは目的。

アツシが言うに、基本がプロトタイプと同じならば、必ずRPGなりのゴールがあるはずとのこと。

序盤でのんびりして他のプレイヤーに差をつけられるのは、彼がもつとも嫌悪する行為だ。

「それ5分前にも聞いた。さっき看板があつたんだからつべこべ言わず歩く！」

「はいはい。まあでも散歩でも気分は良いよね」

小一時間ほどは歩き通しだったが、やはりVRならではの幻想的と比喻できそうな世界を歩くのは楽しい。

「本当のんき暢気な奴。俺だけなら走ってるのに」

アツシは軽く愚痴ると、前を向いて黙々と歩みを進める。

「そんなこと言っただってさあ……」

時は数十分前に遡る。

元々せっかちなアツシが、徐々に歩く速度を早めるものだからジュンが負けじと追い越し、追い越されを繰り返すうちに走り始めた。

結局は二人とも全速力になってしまったが、突然何故かジュンだけ急に動けなくなって地面に倒れこんでしまった。

原因はステータスだ。この世界では、移動速度や攻撃速度は敏捷という数値で補整され、行動限界値は持久力に依存している。

「魔法タイプの僕が物理タイプの君に勝てるわけないじゃんか……」

PWではステータスが二つに大きく分類されている。筋力・持久力・敏捷・感覚の身体特徴と、魔法技術の生成・収束・操作・特性。総数値が前者が高ければ物理タイプ、後者なら魔法タイプと二人は呼んでいた。

「……まあな。俺も悪かったよ。後半はお前に頼りがちになるんだしな」

「でも考えてみるとプロトタイプとこの世界は色々違いがあるね。前作ったキャラ育成方針とかもまた考えなきゃね？」

「だろ？そうだよな？俺はやっぱり物理タイプは……」

この手の話にはいつもアツシは食いついてくる。

まだ始まったばかりだし、ここで気まずい雰囲気は遠慮したかったジュンは仕方なくこの話題をふった。

……長くなるし途中から訳分からなくなるけど、まあ暇潰しにはいいかな。

アツシを適当に頷いたり聞き流しているうちに、ようやく目的地へと辿り着く。

辺境の街エスニア。

そこは大陸の極東に位置し、この世界に訪れた旅人達が休息や装備の支度をするために出来た、都までの言わば中継地点。

「ふう… やつとここかあ」

「ああ。あの時はここからスタートだったから苦労しなかったよな」
「それにしても寂れてるね、こんなとこだっけ？」

簡単な杭で紡がれた木枠が囲むその小さな街は、建物も数えるほどで、道行く人影すら辺りには見えない。

「…… ちよつと早く着き過ぎたのかもな」

アツシは景観を楽しむジュンを置いて、一人で黒い看板を掲げた店へ入ってしまった。

「ちよつと！？置いていくなよお」

慌ててジュンもアツシについて店の中へ続いた。

N P C

「いらっしゃいっ！あんまり品揃えは良くないが見つて下さいよっ！？」

店の中は木製の上に置かれた様々な武器や防具があり、奥から活気のある店主の声が聞こえる。

「あー…装備を揃えたいんだが…」

二人が店主のいるカウンターまで行くと、急に彼の顔付きが変わった。

「あんっ？なんだ、随分弱っちい旅人だな」

頭部の禿げた褐色の肌を持つ中年の店主は、そう言ってじろじろとジyun達を見回した。

「…ね、あの人NPC？」

「…多分な。スゲーリアルだけど」

N P Cとはノンプレイヤーキャラクターのことで、R P Gによく出てくる『むらびとA』や、こんな店の主人を指す。

基本的は指示された行動しか出来ず、プレイヤー達の旅のフォローをする存在。

「…ま、いいか。客人には変わりねえ。これが商品」

なんともふてぶてしい態度で彼は二人の前に購買画面を展開した。

……なんてNPCだ。実はプレイヤーじゃないの？
そう思い、ジューンは画面ではなく店主を凝視する。

「あのさ、俺ら10000ELDエルドしかないから、その金額で絞ってくれないか？」

どうやらアツシが見た画面には、とても二人が買うには高価過ぎるアイテムばかりだったらしい。

「おつと悪いな。お前さん達のような旅人には手が出せねえか」

またもや憎まれ口を叩きながらも、店主はアツシの意図を察して画面を操作した。

「……無難な片手剣より、やっぱり両手剣かな……でも必要筋力値高いな……ジューン、お前は？」

「えっ？ああ……僕は短剣かな。魔法タイプだし」

購買欄に提示された武器の中で、唯一必要筋力値がない短剣しか装備出来そうになかった。

「なんだ？お前達、必要筋力値の定義も知らんの？」

いきなり大きな顔を押し出して、NPCはジューンの会話に参加し始めた。

「必要筋力値つてのは、あくまで規準だ。自分のステータスが越えてなくても装備はできるぞ？」

「へえ……デメリットは？」

「ある。筋力値が足りなければそれだけ重く感じて行動限界値に達

しやすい。あと多少ダメージにも幅が出る」

その言葉を聞くと、アツシはニヤッと笑い、ジュンに頭を下げた。

「金貸してくれっ!」

「はい?」

唐突な申し出にいささか面食らいジュンだが、彼が指差す画面を見て納得した。

「なるほど。両手剣は1500ELDなんだ。短剣は…安っ、200って…」

「安いがお前さんの腰にぶら下げたそれより、よっぽど上等な品だぞ」

また店主が首を突っ込んでくる。

「……わかったよ。じゃあ会計してください」

渋々了承すると、ジュン以外の二人は満足そうな笑顔をしている。

……店主よ、アンタ本当にNPCなのか?、ある意味関心するよ。

「まいどありっ!」

店主が大声をあげると、ジュン達のPWが自動展開して購入アイテムを表示した。

短剣【アイアンダガー】

必要筋力値 0

攻撃力 4

耐久性50/50

材質：鉄

グレード：C

「あの…グレードって何ですか？」

アイテムの1番下に書かれた文字を見てジュンが聞いた。プロトタイプには、こんな表示は無かったはず。

「そいつはギルドの決めた品質ランクだ。Cは金属、Bは鉱石、Aは合金。店やプレイヤーが作ったアイテムには表示されるんだよ」

「じゃあマイナスは？」

「魔法耐性だ。マイナスの武器は魔法が付与出来ないが、プラスなら魔力を込めればその武器の力を発揮出来る。」

なんとなく理解が出来た。マイナスは通常品、プラスはマジックアイテムということだ。

「ま、プラスなんて滅多に出ない。モンスターからのドロップか、遺跡の出土品ぐらいだろうな。尤も、モンスタードロップにはグレードが付かんから効果も不明だがよ」

そう言っただ店主は手元にあつた煙草に火を点けた。

「よし…おっさん、色々ありがとな。俺ら行くわ」

「そうだね…えっと、ありがとうございました」

武器だけで防具は一切新調出来なかったが、このNPCとのやり取りのお陰で知らない情報も得られたため、二人にとっては有意義な会話に感じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3315f/>

3rdworld

2010年10月28日05時01分発行